



塩谷町の指定廃棄物最終処分場・調査候補地を見学して

昨年7月、環境省は、塩谷町に対して栃木県の指定廃棄物最終処分場の詳細調査候補地として同町の上寺島地区寺島入の国有地3.0ヘクタールが選出されたことを伝えた。

私は、かねてから、この問題の行方が気になっていたが、昨年12月8日、日光市の『さよなら原発！日光の会』主催の現地見学会に参加させてもらったので、その時の事を中心に報告しておきたい。

当日の参加者は十数名。同町の小型バス2台に分乗、現地へと向かう。走るにつれて道沿いに処分場反対の立て看板が殆んど各戸ごとに出されている。それらの多くは全くのお手製といった趣で、あまり手慣れたつくりとは言えない看板であった。おそらく休みの日にでも家族総出でコンパネにくぎを打ち付け、ペンキなどを塗って作り上げたのだろう。それは一層、各家々の方たちの切実な思いが伝わってくるものであった。私自身も20年以上も前のことになるが、自宅の隣地の高台に産業廃棄物の処分場を作られかけて、反対運動を行った。その間の約一か月は食事も、砂をかむ様な感じだった。その時のことをフと思い出していた。



273号線を通って西荒川ダムを左手に見下ろしつつ、ダムに流れ込む西荒川に沿って未舗装の山道に入る。クネクネと曲り、アップダウンの多い道を現地に近付いていく。上るにつれて、殆んど手つかずと思われるような自然林の間を流れる、清らかな流れが目に入ってくる。ハイキング・コースにでもしたらと思われるような景観が続く。

極めつけは大滝だ(左下写真)。堂々とした川幅いっぱい広がる美しい滝。滝の上は、広い、柔らかそうな黄土色の岩床になっていて、その岩肌に沿って、なめらかに滑るように水が下っていく。とても気持ちの良いところだった。先に到着していた人たちの中には、早くも長靴で流れに入り込んでいた人もいた。私は長靴の準備がなく、残念だった。

処分場候補地は大滝を更に1kmほど、さかのぼった、「ほうずき橋」付近の川の右岸、山手側に位置する傾斜地である。地内に入ってみると、黒木の人工林ではあるが、西荒川に近い傾斜の下部の方では、なんと湧水があって敷地内に流れを作っているのではないか。処分場はこの傾斜地をさらに掘り下げて建設されることになる。

現地を見た後、有名な尚仁沢湧水に行った。以前に何度も行ったことがあるところだが、網の目のように地下に張りめぐらされた伏流水が、突然この地点で、いたるところから地表に湧き出してくる。そのさまは何度見ても圧巻である。改めてその水量の多さに感心した。候補地の地層も、おそらくは、ここと大差ないのではなかろうか。

塩谷町の候補地に処分場を作ることについて、ある人が湖の上に処分場を作るようなものだという感想を述べたと聞いたが、その言葉が大げさでなく、実感をもって感じられた。

また、この処分場には焼却炉が設置さ

目次:

最終処分場候補地見学	1
処分場周辺地図	2
川むしたんけん行川・中井橋	3
年間1ミリシーベルト?	4

お知らせ

次回の定例会
2015年3月4日(水)
日光市民活動支援センター
午後1時~2時



2002年10月、本会主催の「第4回 ゆったりウォーク」は東荒川ダム・尚仁沢湧水地を訪ねるイベントでした。放射能問題など想像もなかった頃。豊かな水とブナの林に感動し、湧水の水での野点を楽しんだ一日でした。写真はその日に撮影した看板。

環境庁によって、全国名水百選に選定されたとの記述があります。原発事故が自然と人の関わりを壊してしまった事実をあらためて感じます。(T)

れ、1kgあたり8000ベクレル以上の下水汚泥が焼却されて62%の減容が図られるという。それは逆に言えば放射性物質が、さらに高濃度化するということだ。焼却ガスは、冷却されたのち、バグ・フィルターを通して放射性物質を除去した上で大気中に放出されるとのことであるが、どこまで除去できるものかは保証の限りではないとのことであった。ここでは、焼却炉からの距離の問題は、作動中に排出される放射能による日常的汚染や万が一の事故に際しては決定的な重要性を持つことになる。

現地へ行って見て、改めて驚いたのは、予定地が日光市と塩谷町の境界線ギリギリのところにあること。そのため、当の塩谷町役場までは約10kmの距離なのだが、日光市の藤原浄水場は3.5km、鬼怒川公園駅まで4kmしかない。今市にある日光市役所ですら、15kmのところだ。これでは、とても日光市は「地元」ではない、などと他人事を言っている場合ではないことが良く分かる。

予定地見学の後、町長には、お忙しい中、時間を割いて我々参加者との懇談の時間をとって下さった。少人数だったので一人ひとり簡単な自己紹介までする時間があり、町長からは、この問題に対する町としての対応の経過報告、町長のお考えなど直接お聞かせいただいた。

この文を書いているところに、メールでの情報が入った。すなわち日光市議会が塩谷町議会から出されていた、『指定廃棄物最終処分場候補地白紙撤回を求める意見書提出』の陳情を、反対多数で不採択にしたという。何とも情けない話になってしまった。本来、廃棄物の処理、処

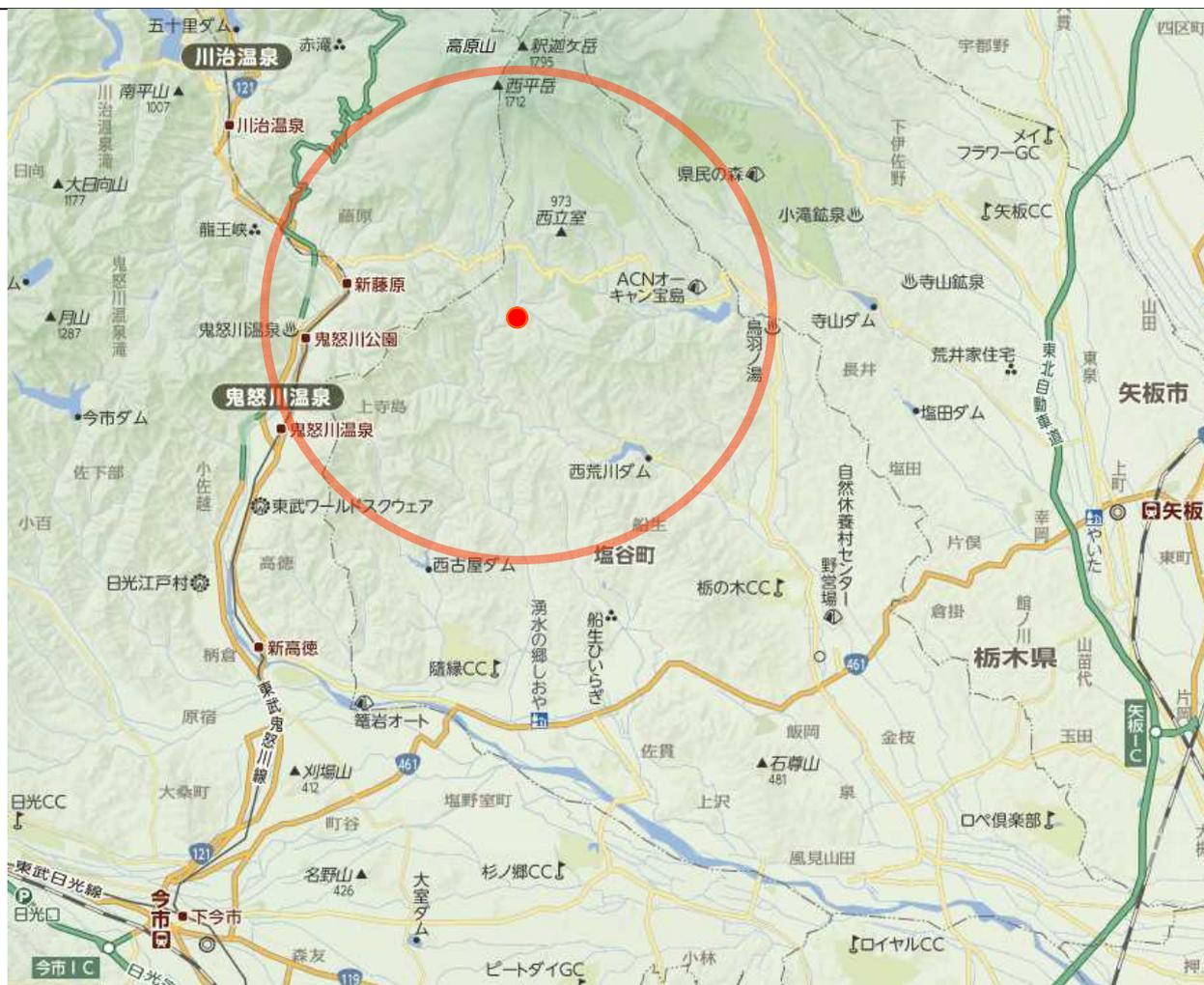
分は、排出者の責任である。原子力発電所から出たものであっても、その原則に変わりはないはずだ。もともと、環境省の各県ごとの処理の方針そのものが見直されなければならない。この土俵に福田知事が乗ってしまったのが、つまずきの発端であろう。知事には、もっと県民の暮らしを守るという姿勢があれば、別の動き方があったように思う。

各市町村におかれては一致団結して県内処分場の白紙撤回を求めて行ってほしいと思う。日光市民も今回の問題を単に塩谷町の事として、地元の話ではない、などと「洞ヶ峠」を決め込んでいるとすれば、将来に禍根を残すことになるだろう。

(2015・2・1 森)



候補地付近：右に「ほうずき橋」が見える。テープは鹿の食害除け。



処分場予定地(丸印)を中心に、半径五キロメートルの円を描いてみました。日光市役所、矢板市役所は予定地からおよそ十五キロメートル、等距離にあります。



川むしたんけん 思わぬ所に… !!!

10月18日(土曜日) 午前10時～
行川・中井橋にて



毎回「NPOなんとなくのにわ」との共催で行なっている「川むしたんけん」。秋季も昨年5月同様、千本木行川橋を予定していましたが、台風18・19号の襲来で想像以上に水量が多く、「無理をしない」精神を尊重して急遽、下流の中井橋に変更して実施しました。

10月18日(土)快晴/気温18℃/水温14℃

増水のため流れの急な本流を避け、水深5センチの中洲の横の流れで生物採取を行ったところ、増水でも流されなかった大型の水生昆虫が見つかりました。子どもたちがそれぞれの皿に種分けした結果は次の通りです。(●は数の多かったものです)

□ 指標生物

- I [きれいな水にすむ]
 - ヘビトンボ カワゲラ プラナリア
- II [少し汚れた水にすむ]
 - カワニナ コオニヤンマ
- III [汚れた水にすむ] なし
- IV [たいへん汚れた水にすむ] なし

□ それ以外の生物

ヒゲナガカワトビケラ、ナガレトビケラ、コカゲロウ、モンカゲロウ、シロタニガワカゲロウ、ガガンボの幼虫、トンボのヤゴ
(●サナエトンボ ●オニヤンマ)
ゲンゴロウ
魚類[●ウグイの稚魚]
ニホンアカガエル

以上、見つかった指標生物の種類と数によって、この場所での今回の水質は[きれいな水]と判定することができました。

▼ 思わぬ所に… こんな生き物が…

中井橋の上流は河川工事によって護岸が整えられている場所ですが、中洲があることで急な増水の時は流れを弱める事ができ、水生生物にとっては生き延びられる大切な場所になっています。ここは川の両側に田んぼが広がりその奥には山が迫っており、台風の後などには堤防の上の用水路近くでビックリマーク(!)の生き物が見つかることがあります。今回のそれはアカハライモリでした。水生昆虫よりもずっと大きく、ぎょっとさせられる腹部の赤い模様に子どもたちの興奮した声があたりに広がっていきました。他にもガムシ、マツモムシ、ゲンゴロウ、コオニヤンマとカワトンボのヤゴ、ヤマアカガエルが見つかりました。

▼ 子どもたちの声

- ◎ ヘビトンボが大きかった。
- ◎ よく探すと生き物がいっぱい見つかってびっくりした。
- ◎ 生きているゲンゴロウを捕まえられた。
- ◎ コオニヤンマのヤゴの抜け殻が見つかるとは思っていませんでした。etc …

▼ 今後に向けて

中井橋付近にはセイタカアワダチソウが繁茂してきており、川の光景も年毎に変わりつつありますが、川の中の生き物たちがこの場所で生まれ、育ち、大空に飛び立っていく循環はこれからもずっと続いていって欲しいものです。

今市地区にはたくさんの川が流れています。行川の別の場所やまだ足を踏み入っていない川に挑戦することを今年度の目標にしたいと思えます。さて、そこではどんな生き物が見つかるのでしょうか! (塚崎)

行川の中洲で川むし探し

土手のセイタカアワダチソウ





- 9月27日(土) ゆったりウォーク 小代編II 主催
- 10月 1日(水) 定例会
- 10月18日(土) イオンレシートキャンペーン贈呈式出席
- 10月19日(日) 川むしたんけん隊
(「NPOなんとなくのにわ」との共催)
- 11月11日(水) 定例会
- 1月 7日(水) 定例会
- 2月 4日(水) 定例会・日光市文化創造館建設説明会出席
- 2月 7日(土) 新年会

「年間1ミリシーベルト」を考える

放射線被ばくについて、次のような問答をよく聞きます。

【Q】 このあたりの空間線量は福島原発事故前は、毎時0.03~4マイクロシーベルトでした。いまは空間線量が毎時0.23マイクロシーベルト以下ならば、それほど深刻な汚染ではないということになっています。事故前の値に比べてとても多い感じがします。どういうことなのでしょうか。

【A】 被ばく線量は年間1ミリシーベルト以下にという政府のガイドラインがあります。1年は8,760時間ですから、1ミリシーベルト=1,000マイクロシーベルトを8,760時間で割ると1時間あたりの許容線量になります。ただし、建物の中では遮蔽効果のため線量が減るのでそれを考えて野外は毎時0.19マイクロシーベルトまではOKという計算になっています。さらにもととの地面からの被ばく0.04マイクロシーベルトを加え、毎時0.23マイクロシーベルトという値を得ます…。

途中の面倒な計算は省略しました。こんな風に数字を持ち出され、「政府が決めたことなので」と言われると、まあ仕方ないかなと思うのは人情です。けれどこの回答では、政府の方針という「年間1ミリシーベルト以下」の根拠については何も説明されていません。この値は、ICRP（国際放射線防護委員会）2007年基準にある、「放射線を扱う管理区域で作業をする場合、一般人の被ばくは年間1ミリシーベルト以下に」がもとになっています。放射線を扱う研究者に、この規則が適用されます。



被ばくのおそれがある実験場は「放射線管理区域」に指定され、そこに立ち入るには、まず健康診断が必要です。白血球、血小板数などの血液検査を行い、「作業しても大丈夫」という医師の診断書をもって準備OK。

研究所に出かけ、数時間の放射線被ばくに

郵便振替口座
00140-4-535550

連絡先
〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183 (8時~17時: 森)
0288-26-3324 (17時~21時: 塚崎)
<http://www.somesing.net/daiyagawa/>



関する研修を受けた後、被ばく量を測定するためのフィルムバッチを受け取り、やっと実験場で仕事ができます。

加速器で作った高エネルギーの放射線を取り扱う実験場は不要な被ばくを防ぐための分厚いコンクリートブロックで遮蔽され(写真:上)、人の出入は頑丈な鉄扉(写真:左下)と鍵で制限されています。このように、研究や医療にやむを得ず使用する放射線は厳しい管理下に置かれているのです。放射性物質についても、もちろん、保管容器、保管・運搬方法など細かい決まりがあります。取り扱いには資格が必要です。

今は原発事故後の緊急時なので、道ばたに散らばり制御が困難になってしまった放射能に、この基準を適用しているのです。「1ミリシーベルト」は「これ以下なら安全」という数値ではありません。とりわけ、放射線に対する感受性の高い子どもたちの被ばくは、大人とは別格に考え、少しでも被ばく量を減らすための手だてを怠らないようにしたいと思います。

空間線量は放射性セシウムの崩壊により、事故直後からはほぼ半分に減りました。これから後はゆっくり減少していき、現在の半分になるまでに数十年かかります。「緊急時」はこれから長い間続くのです。放射能測定、勉強会など、被ばくを軽減する活動を今後も続けていきたいと思っています。(手塚)

編集後記

近頃、短い言葉で何かを表現するのが流行っている。新聞の見出しに踊る「積極的平和主義」なる活字を見るたび、ジョージ・オーウェルの小説『1984年』にあった独裁政党のスローガン「戦争は平和である (War Is Peace)」を、つい思い出してしまふ■独裁者の掲げる標語は他に2つ、「自由は屈従である (Freedom Is Slavery)」、「無知は力である (Ignorance Is Strength)」。これらのメッセージを疑いなく受け入れるため「愛情省」は人々に「二重思考」を強制する。「思想警察」はすべての人民を監視し、「平和省」は「平和のための戦争」を絶え間なく遂行している。自由を否定し、恒久的な不平等を実現し、特権階級のみが栄える究極の管理社会を描いたこのお話は、1948年ごろ執筆されたという■はじめて読んだのは40年ほど前である。再読した記憶はなく、その後はずっと本棚にある。少し前に似たような名前の小説が出たが、関心を持たなかった。今になって記憶がよみがえるのも不思議なことだ。それだけ衝撃の強い作品だったのだろう。願わくばこの先、どこかの広報に「危険は安全である (Danger Is Safety)」などという標語が出てきませんように。(T)